



町民文芸

只見短歌会

十一月詠草

大塚栄一

指導

インフルエンザの孫に届きし担任の篤き手紙を家中で読む

古川 英子

無差別に物捨てをればもったいなし戦前戦後を生き来し我は

齊藤ちひろ

年ごとに姉妹に里の新米を送る息子らに頭下るも

吉津 政枝

保育所の子供ら踊る歌舞伎舞余りのうまさに涙出できつ

五十嵐夏美

長き冬の訪れ近き小春日に痛き膝庇ひ冬囲ひ急ぐ

馬場 八智

浅間山噴火の溶岩凄まじく今も煙の立つを見上ぐる

渡部ゆき子

男手のなくて庭木の数も減り細木余れど貫ひ手もなし

皆川 恒子

湯揉みして二人の孫を抱き入れる夫は痛みを忘れるらしき

目黒 富子

亡き父母の温き背中を思ひをり若く逝きしを今も悔まる

渡部ヨリ子

この秋に夫を亡くして独り住む淋しき友よ電話の長し

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

十二月例会

目黒十一

指導

立冬や村の総出の堰普請
模様のごとトマト落ちしを冬耕す

郁子

石燈籠奉納済ます冬初め
白壁の家並配して柿熟す

修一

粉じらみ執念深く冬薔薇
黒ずんだ蛙飛び出す池普請

一灯

ころぶなよ風邪引くなよと人の声
膝と手で体ささえて実南天

邦男

躊躇わず三年もの日記買う
古時計はずせし柱冬に入る

又壺歩

日のありて雨脚ひかる鴨の池
峠路のあらたな墓碑や冬紅葉

恒夫

雪吊や水音絶えぬ御薬園
一年の農事畢んぬ紅葉鍋

吉児

選別の豆をころがす夜長かな
稲架用の細木刻めり十二月

隆堂

霜夜更く妻のいびきの安らかに
アンケートすべてを丸に小六月

邦夫

写真家のつと立ち上がる大枯野
門衛の迷彩服や冬茜

笑羊

田仕舞や演芸会に招かれて
冬枯るる人影の無き村の中

リウコ

針箱とともに老いゆくちゃんちゃんこ
はげましてはげまされ居て日向ぼこ

康女

銀杏落葉ブランコゆらし留守を待つ
川音や空青々と冬ぬくし

都

冬に入る一週間の鍋づくし
入口を狭くせまくと冬に入る

一穂

初雪や葦原揺れもせず立ちて
夕焼を映す大池冬に入る

洋子

小春日や町の記念樹梅植うる
鳥の声流れ見回す枯るる中

敦子

横山に越後嶺つづき神渡
しぐるるや小屋に水車の外されて

礼